埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第284集

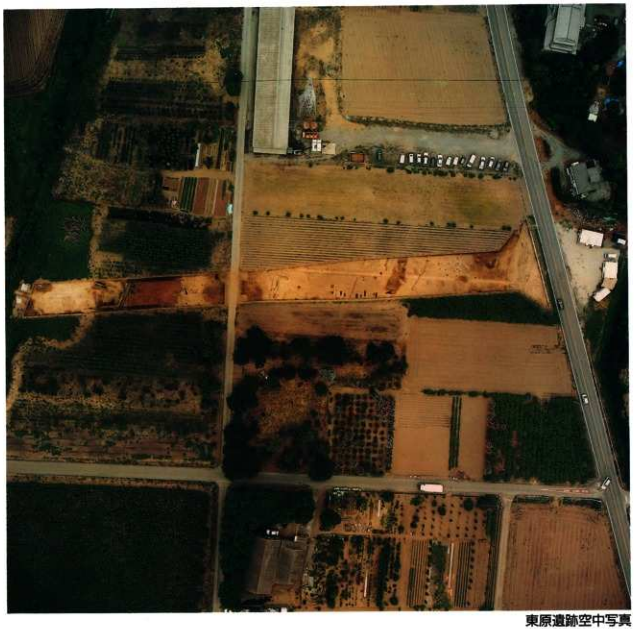
花園町

東原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大里中央地区）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2002

埼　玉　県
花　園　町
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



東原遺跡空中写真

発刊に寄せて

わが国を取り巻く社会経済情勢は、本格的な少子・高齢化の到来、高度情報化の進展、地球環境問題など大きく変化しております。

本県では、このような状況を踏まえ、変化に的確に対応し、県民お一人おひとりが真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国づくり」を実現するために、「環境優先」「生活重視」を基本理念として、新しい時代にふさわしい県政の運営に努めております。

本県農業におきましては、農業分野の国際化などに対応して種々の施策を行う中で、地域の実情に即したほ場・農道・用排水施設などの整備を進めております。特に農道につきましては、農産物の流通の合理化を図るとともに、利便性・快適性の高い農村環境をつくり出すため、整備・改良に努めております。

埼玉県北部にある大里地域は、県下有数の農業地帯であり、主に生産される野菜類は全国的な生産量を誇ります。これらの生産品の円滑な輸送を促進するため、深谷市から花園町を経て川本町にかかる農道を整備することといたしました。

農道整備を進める中、花園町の用地内に縄文時代から中世までの遺跡が存在していることが判明しました。花園町ではこれまで県内最古の縄文時代の住居跡が発見されており、古くから人びとが生活していました。本県では、これらを貴重な埋蔵文化財であると考えまして、発掘調査を実施し記録保存の措置をいたしました。

この報告書は、その調査結果をまとめたものです。県民の皆様方の教育及び文化向上のために御活用いただければ幸いです。

平成14年11月

埼玉県知事　土屋義彦

発刊にあたって

私たちのまち花園は、都心より約70ｋｍ圏に位置し、高度経済成長とともに着実な発展を遂げてまいりました。

しかし、21世紀を迎えた今日、少子高齢化、国際化、高度情報化や地方分権の進展など行政を取り巻く環境は急激に変化する一方、町民のニーズは多様化・高度化してきています。このような中、花園町では先人たちが育んできた郷土の歴史・文化や産業、そして豊かな自然や地理的特性及び地域社会の活力などをより一層大切にしながら、花と緑に包まれた個性あふれる町づくりの推進を図るため、平成23年度を目標年度とした第４次花園町総合振興計画を策定したところでございます。

ところで、本町は豊かな自然の恵みを受け、数多くの遺跡が所在しております。今回報告の東原遺跡は、昭和61～62年度に実施した町内遺跡詳細分布調査の際に航空写真により確認されたもので、その特徴的な方形の平面形からおそらく中世の館跡ではないかと推定されていたものです。発掘調査の結果、方形溝などのほか、町内では初出土となる旧石器時代の石器など大きな成果を上げることができました。

花園町では、このような先人の営みにより築かれた特色ある地域文化を大切に伝えていくことを基盤にして、新世紀にふさわしいまちづくりの実現に努力してまいりたいと存じます。

結びにあたりまして、本報告書の刊行にあたりご協力いただきました多くの方々に心から感謝申し上げご挨拶に代えさせていただきます。

平成14年11月

花園町長　柳　雅己

序

埼玉県では「環境優先・生活重視」「埼玉の新しいくにづくり」の基本理念のもと、県民一人ひとりが真の豊かさを実感できるような施策を進めております。

花園町のある大里郡は、埼玉県北部にあって農業が盛んな地域で、埼玉県では「埼玉の新しいくにづくり」の基本理念に基づき、農業基盤の整備に力を入れています。この政策のもと、深谷市から川本町にかけて農道が整備されることになりました。

事業用地内にはいくつかの遺跡が所在しておりますが、今回報告いたします東原遺跡は、航空写真によってその存在が推定されたという、たいへん珍しい発見の経緯をもった遺跡です。事業予定地内の事前確認調査によって、遺構が検出され改めてその所在が確認されました。

東原遺跡の取り扱いにつきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、各関係機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになりました。そのため当事業団が、埼玉県農林部農村整備課ならびに花園町の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器や縄文時代から中・近世にいたる遺構、遺物が発見されました。なかでも、遺跡発見の端緒となった航空写真の方形区画に伴うと思われる溝跡が検出されたことは、大きな成果でありました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

なお本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県農林部農村整備課、埼玉県大里農林センター、花園町教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成14年11月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　桐川卓雄

例 言

1．本書は、大里郡花園町に所在する東原遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

東原遺跡（ＨＧＳＨＲ）

大里郡花園町大字北根字東原１７８番地他

平成13年８月13日付け教文第２－40号

3．発掘調査は、農林漁業用揮発油税身替農道整備事業（大里中央地区）に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県農林部農村整備課・花園町の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第１章の組織により実施した。

5．本事業のうち、発掘調査は、木戸春夫、渡辺清志が担当し、平成13年６月11日から平成13年９月30日まで実施した。

6．整理・報告書作成作業は、木戸が担当し、平成14年９月２日から11月29日まで実施した。

7．遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社ジーアイエス関東に委託した。

8．発掘調査時の遺構写真撮影は調査担当者が行い、遺物撮影は、大屋道則が行った。

9．遺構図の整理及び第２原図の作成は主に渡辺が行い、出土品の整理・実測および図版の作成は旧石器・縄文を渡辺が、それ以外は木戸が行い桜井元子の補助を得た。

10．本文の執筆は、Ｉ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、旧石器・縄文時代の遺物を渡辺が、それ以外は木戸が行った。

11．本書の編集は、木戸が行った。

12．本書にかかる資料は平成14年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

13．本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

（敬称略）

大里農林振興センター　花園町教育委員会

森下昌市郎　小林　高　村松　篤

凡 例

1．本書の遺跡全測図におけるＸ・Ｙの座標値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36度00分00秒、統計139度50分00秒）に基づく座標値を示す。また、各遺構図における方位は、全て座標北を示す。

2．遺跡におけるグリッドは、10ｍ×10ｍ方眼で設定し、呼称は北西隅の杭番号である。

3．遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図　掘立柱建物跡・1/60　土壙・1/60

溝跡・1/60　井戸跡・1/60

遺物図　土器・石器・・・1/3

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記している。

4．全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

ＳＢ・掘立柱建物跡 ＳＫ・土壙

ＳＤ・溝跡 ＳＥ・井戸跡

5．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位ｍである。

6．本書に掲載した地形図等は以下のものを使用した。

国土地理院　1/50000地形図

「深谷」「熊谷」「寄居」「高崎」

花園町都市計画図　1/2500

目　次

口　絵
発刊に寄せて
発刊にあたって
序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至るまでの経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 5
Ⅲ　遺跡の概要 …… 7
Ⅳ　遺構と遺物 …… 8
　1　掘立柱建物 …… 8
　2　井戸跡 …… 8
　3　土壙 …… 10
　4　溝跡 …… 20
　5　道路跡 …… 26
　6　グリッド・その他出土遺物 …… 31
Ⅴ　まとめ …… 34

挿図目次

第1図　埼玉県の地形 …… 3
第2図　周辺の遺跡 …… 4
第3図　遺跡周辺の地形 …… 6
第4図　東原遺跡全測図 …… 7
第5図　第1号掘立柱建物跡 …… 8
第6図　第1・2号井戸跡 …… 9
第7図　土壙(1) …… 11
第8図　土壙(2) …… 12
第9図　土壙(3) …… 13
第10図　土壙(4) …… 14
第11図　土壙(5) …… 15
第12図　土壙(6) …… 16
第13図　土壙(7) …… 17
第14図　第1号溝跡 …… 22
第15図　第4号溝跡 …… 23
第16図　第2・3号溝跡 …… 24
第17図　第7・8・9・10号溝跡 …… 25
第18図　第6・11号溝跡 …… 26
第19図　第13・14号溝跡 …… 27
第20図　第5号溝跡 …… 28
第21図　第15号溝跡 …… 29
第22図　道路跡 …… 30
第23図　旧石器・縄文時代の遺物 …… 32
第24図　中世の遺物 …… 33
第25図　方形区画推定図 …… 35

図版目次

図版１　東原遺跡航空写真
図版２　第１号建物跡
第１号井戸跡
第２号井戸跡
第１号溝跡
第４号溝跡
第３号溝跡
第５号溝跡
第６号溝跡
図版３　第７・８・９・10・11号溝跡
第13・14号溝跡
第１・２・３号土壙
第８号土壙
第12号土壙
第13号土壙
第15号土壙
第16・22号土壙
図版４　第18号土壙
第19号土壙
第14・24号土壙
第25号土壙
第26号土壙
第27号土壙
第28・29号土壙
第30号土壙
図版５　第31・33号土壙礫出土状況
第31・33号土壙
第35号土壙
第36・37号土壙
第38・39号土壙
第42号土壙
グリッド出土尖頭器
図版６　グリッド出土縄文土器
グリッド出土石器
第６号溝出土遺物１
第６号溝出土遺物２
砥石
金属製品

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。農業の分野においても、豊かさとゆとりが実感できる埼玉農業の確立をめざして、多くの事業が計画されている。農産物の輸入自由化に対応し、経営規模の拡大による低コスト農業を実現するためには、ほ場の大区画化や用排水路、広域農道等の整備などを推進してきた。県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業「大里中央地区」の農道整備事業もそのひとつである。

事業に先立ち、埼玉県深谷土地改良事務所長から平成12年10月24日付け深地第324号で、埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成13年2月21日に遺跡所在確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が確認されたことから、平成13年3月5日付け教文第1201号で、概ね次のような回答をした。

1　埋蔵文化財の所在

名　称	種　別	時　代	所 在 地
東原遺跡 (66−054)	城館跡	中　世	花園町大字北根字東原

2　取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

当該事業と東原遺跡の保護については、深谷土地改良事務所との間で調整を重ねたが、事業の計画変更が不可能であることから、事業地区について記録保存の措置を講ずることとし、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

発掘調査は平成13年6月～8月の3ヶ月にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法57条第1項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から57条の3にもとづく発掘通知が提出され、それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届

平成13年6月11日付け教文第2－40号

発掘通知

平成13年7月31日付け教文第3－407号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

発掘調査は、平成13年6月11日から平成13年9月30日まで実施した。調査面積は2,600㎡である。

6月　プレハブ設置、器材運搬などの発掘準備と平行し、重機による表土除去作業を行った。表土除去作業終了後遺構確認を行い調査を進めた。

7月　今回の調査の中心となる堀跡と目される部分を先行し遺構精査を行ったところ、北側については自然流路に重なるように掘られていることが判明した。その後は他の溝、土壙などの精査を順次行った。

8月　引き続き遺構精査を行い、あわせて実測図を作成した。また、航空写真撮影を実施した。図面作成が終了した後、月末から埋め戻し作業に入った。埋め戻し終了後、書類等の整理を行い、実績報告書を作成して調査を終了した。

整理・報告書刊行

平成14年9月2日から11月29日の期間で整理作業を行い報告書を刊行した。

9月　上旬に、遺構の第2原図を作成し、出土遺物の拓本・実測を行った。

中旬には、遺構の図面のトレース・版組を行った。

下旬には、遺物の写真撮影、原稿執筆・割付の作成を行った。

10月　入稿して校正作業を行い、11月に報告書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)　発掘調査（平成13年度）

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事 兼 管理部長	大舘　健
〈管理部〉	
管理幹	持田紀男
主任	腰塚雄二
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池　久
〈調査部〉	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
専門調査員（調査第一担当）	村田健二
統括調査員	木戸春夫
主任調査員	渡辺清志

(2)　整理・報告書刊行（平成14年度）

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘　健
〈管理部〉	
管理幹	持田紀男
主任	腰塚雄二
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池　久
〈調査部〉	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員（資料整理担当）	磯崎　一
統括調査員	木戸春夫

II　遺跡の立地と環境

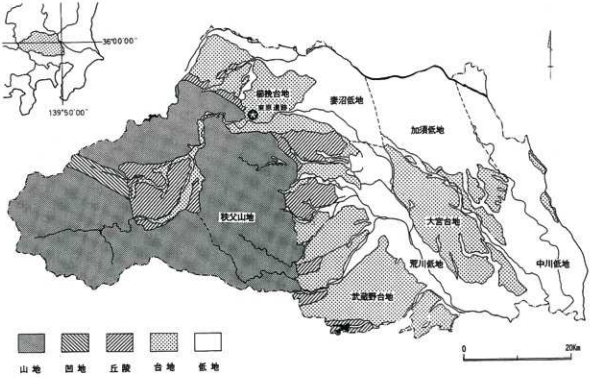
1．地理的環境

花園町は県北部に位置し、産業は農業が主体である。野菜を中心とした畑作が多く、花卉の生産や養鶏などの畜産業も盛んである。

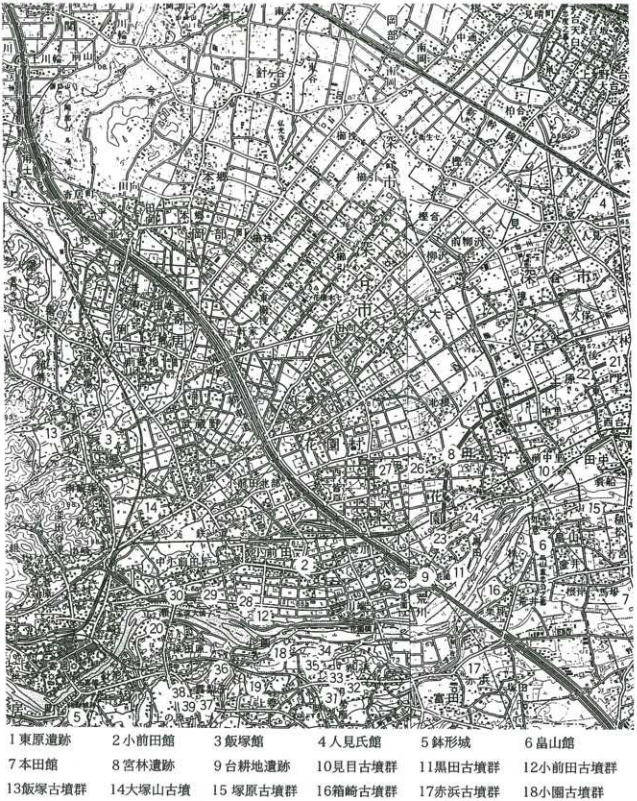
東原遺跡は、花園町大字北根字東原に所在し、深谷市、花園町、川本町の行政境に近接している。周囲はほとんどが畑で、遺跡範囲の南側に接して北武蔵広域農道が東西に伸びている。

埼玉、山梨、長野の３県の境である甲武信岳に源を発した荒川は、秩父盆地を北流し上武山地にあたって流れを東に変える。東流した荒川はやがて狭隘な山地から抜け寄居町で平野部に出る。ここから熊谷市付近までは扇状地となり、右岸は江南台地、左岸は櫛引台地と呼ばれる。

遺跡は左岸の櫛引台地上に立地する。櫛引台地は扇状地性の台地で、寄居町波久礼周辺を扇頂とし、扇端は妻沼低地に面する岡部町から深谷市を経て熊谷市三ヶ尻周辺にわたる。北は藤間川で限られ、南限は荒川である。台地は荒川の浸食を受け段丘を形成する。上面が櫛引面、下面が寄居面と呼ばれ、段丘崖には湧水が見られる。この湧水に恵まれた寄居面には縄文時代から人びとが生活し、多くの遺跡がみられる。また、寄居面は侵食によって２～３段ほどの面を形成している。これに対し上位の櫛引面は遺跡密度が薄い。東原遺跡は上位の櫛引面に立地する。櫛引面は地下水が伏流水となり、昔から水の乏しい所とされているが、遺跡周辺は地下水位が比較的高いのであろうか大雨の時には浸透しきれない水が台地上を西から東に流下する。地元ではこの現象を「野水が走る」と言っている。そのため台地上には東西方向の小規模な侵食が見られ、集落は高まりに沿って東西方向に発達している。遺跡もこの東西方向の高まりに乗っている。



第１図　埼玉県の地形



1 東原遺跡	2 小前田館	3 飯塚館	4 人見氏館	5 鉢形城	6 畠山館
7 本田館	8 宮林遺跡	9 台耕地遺跡	10見目古墳群	11黒田古墳群	12小前田古墳群
13飯塚古墳群	14大塚山古墳	15 塚原古墳群	16箱崎古墳群	17赤浜古墳群	18小園古墳群
19上郷古墳群	20立ヶ瀬古墳群	21大林Ⅰ遺跡	22大林Ⅱ遺跡	23下南原遺跡	24宮台遺跡
25上南原遺跡	26西上遺跡	27東大塚遺跡	28橋屋遺跡	29塚屋遺跡	30北塚屋遺跡
31伊勢原遺跡	32宮の前遺跡	33宮側上町遺跡	34常楽寺南遺跡	35昌国寺遺跡	36日向上遺跡
37露梨子遺跡	38甘粕原遺跡	39ゴシン遺跡			

第2図　周辺の遺跡

2．歴史的環境

櫛引台地は、中央部ほど遺跡が少なく、縁辺部に遺跡が集中する傾向がある。花園町でも上位の櫛引面には遺跡の分布はまばらであるが、下位の寄居面すなわち荒川沿いには多くの遺跡が所在する。また、荒川左岸と右岸では遺跡の分布に大きな差が見られる。江南台地を控えた右岸は遺跡の密集度が高く左岸とは様相が違っていることは既に指摘されている(鈴木 1983)。

ここでは左岸の遺跡について概観する。

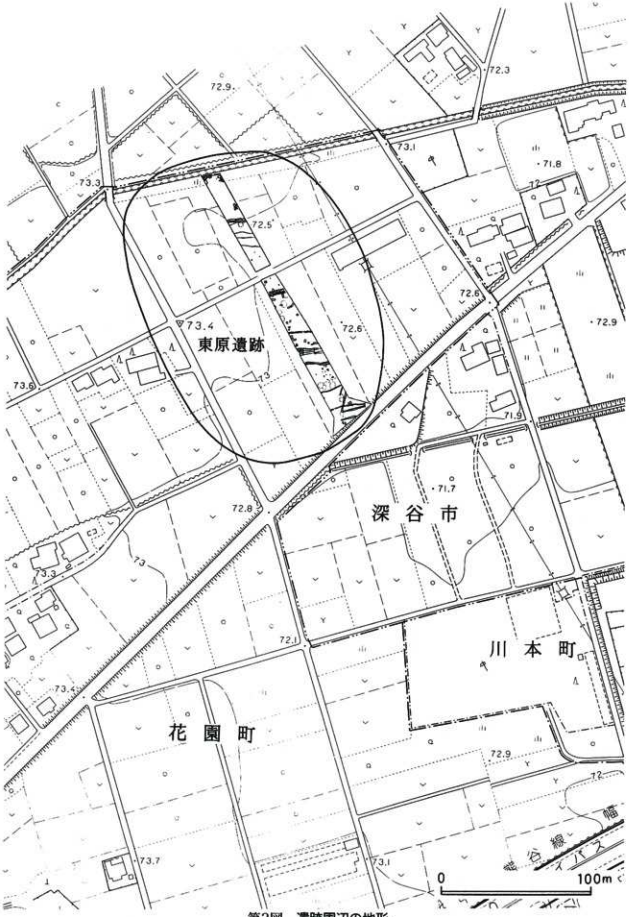
旧石器時代の遺跡は、寄居町末野遺跡、金獄遺跡や美里町安光寺遺跡、如来堂遺跡、普門寺西山遺跡、岡部町北坂遺跡など寄居町以外は荒川から離れた丘陵部にまとまって見られる一方で、熊谷市籠原裏遺跡では樋状剥離を有する黒曜石製の尖頭器が出土し、深谷市東方城跡では珪質砂岩製であるが柳葉形の尖頭器が発見されるなど、扇端部でもわずかではあるが遺跡が認められる。妻沼低地に面する扇端部でも湧水があり生活するための条件は満たされていることを考えれば今後この地域においてもさらに遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代の遺跡は、湧水の豊富な寄居面に多く営まれている。草創期・早期では、花園町宮林遺跡で住居跡が検出されている。前期は同じく宮林遺跡、上南原遺跡、台耕地遺跡、橋屋遺跡、北塚屋遺跡、寄居町岩崎遺跡、北塚屋遺跡、川本町大林Ⅰ遺跡がある。中期には遺跡数が増え花園町下南原遺跡、宮台遺跡、西上遺跡、東大塚遺跡、川本町大林Ⅱ遺跡などが加わる。後・晩期になると遺跡数が減少し、塚屋遺跡、宮台遺跡、橋屋遺跡に見られるだけとなる。調査事例だけで見るならば、早期まではより高い段丘面に立地し、前期・中期は低位の面にも降りてきている。後・晩期は低い段丘面に遺跡が展開しているようである。

弥生時代の遺跡はほとんど発見されていないため様相ははっきりしない。古墳時代に入っても遺跡数は少ない。台耕地遺跡で五領期の住居跡が、宮林遺跡では和泉期の遺物が検出され、7世紀代の住居跡が調査されている。宮林遺跡の西方には鬼高期の集落の存在が予想される。古墳は、東大塚古墳、黒田古墳群、小前田古墳群などがあることから、これらの古墳の造営を支えた集落がさらにあるはずである。

奈良・平安時代になると、台耕地遺跡で平安時代の住居跡が59軒調査されている。ここでは鉄生産にかかわる精錬炉や工房跡が検出されている。時期は古くなるが、寄居町箱石遺跡で出土した箱型製鉄炉を用いた集団と、技術的なつながりがあるのかどうかなど興味深い問題である。この時期には箱石地区の鉄、末野地区における須恵器生産とともにいわば重工業的生産地帯のような性格を持っていると思われる。

古代末から中世にかけては、武士団が活躍する時期である。鎌倉幕府の成立にあたっては畠山重忠、熊谷直実など著名な武士が活躍するが、執権北条氏が幕府の実権を握ると有力御家人たちは排斥されていく。南北朝、室町幕府の成立期には、新田氏が児玉党の武士を味方にし鎌倉に攻め込んでいるが、それぞれの武士団も北朝の足利氏、南朝方についた新田氏に分かれて戦っている。南北朝の騒乱が収まっても、鎌倉公方足利氏と管領上杉氏との争いの中で別府氏、玉井氏などが衰退していく。足利氏が古河に移ると、この地域はさらに複雑な様相を呈する。さらに山内上杉氏と扇谷上杉氏の対立を経て後北条氏の関東支配、越後上杉氏と甲斐武田氏との争いなど数多くの戦乱の場所となってきた。花園町周辺は、武蔵七党の猪俣党に属しており、町内には小前田氏館跡、飯塚館跡がある。



第3図　遺跡周辺の地形

Ⅲ　遺跡の概要

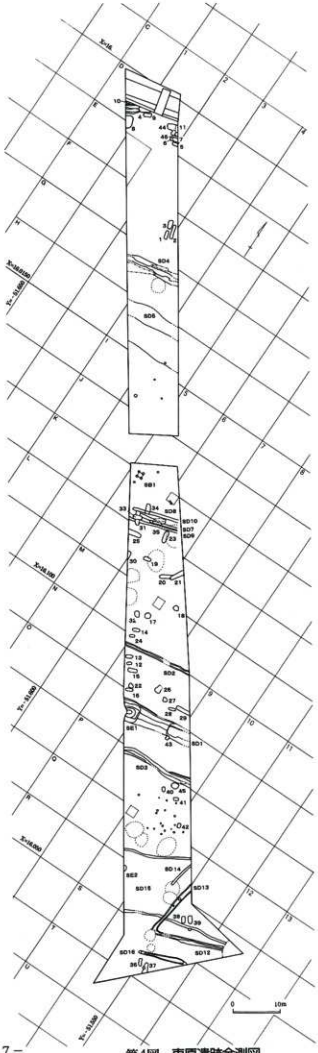
東原遺跡は櫛引台地上にあり、標高は現地表面で73mである。櫛引台地は荒川の浸食を受け、花園町では８面の段丘面が形成されている。遺跡は２段目の段丘面にあり、地形的には古いことが窺われる。ちなみに荒川までの距離は約2.5km、標高差は約13mである。

遺跡発見の端緒は、花園町教育委員会の分布調査の際、昭和30年撮影の航空写真に方形のソイルマークが写っていたことによる。形状が方形であることから、中世の館跡ではないかと推定された。その後、この方形区画の中を通る農道が建設されることになり、試掘調査が行われた結果、堀と思われる溝跡の存在が確認された。

調査によって確認された遺構は、掘立柱建物跡１棟、土壙46基、溝跡15条、ピット25であった。掘立柱建物跡は１間×１間で柱穴には根石かと思われる礫が入っていた。土壙は形態から、長方形と円形ないし円形に近い不整形の２種類に分けられる。溝跡は、調査区を横断する形で東西方向のものが多い。堀と思われるものも溝跡の中に２条含めたが、これは方形区画の北辺と南辺にあたるものである。また、幅が10mを超える流路と思われる地形が2箇所検出された。

遺跡の層序は、現況が畑及び造園業による植木場であったことから、遺構確認面まで耕作土であった。深さは20～40 cmで調査区北側ほど浅かった。確認面はローム層であるが北側は浅いため礫が交じっていた。

遺物は、旧石器時代の黒曜石製の尖頭器が1点出土した。縄文時代では後期の土器片が出土した。溝や土壙覆土中からの出土であり、確実に遺構に伴うものはないと思われる。中世の遺物は、15世紀と思われる内耳土器、片口鉢などの破片がわずかに出土しており、方形区画と関連するものと考えられる。



第4図　東原遺跡全測図

Ⅳ　遺構と遺物

1．掘建柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第5図）

K－5グリッドに位置する。1間×1間の建物である。柱間は1.06 mであることから、換算すると3.5尺で作られたものと考えられる。主軸方位はN－9°－Wである。各柱穴には人頭大の石が入っていた。根石として使われたものと考えられる。各柱穴の大きさは次のとおりである。P1＝46×46cm、深さ35cm。P2＝50×36cm、深さ50cm。P3＝50×40cm、深さ46cm。P4＝40×35cm、深さ15cm。

遺物は、出土しなかった。

2．井戸跡

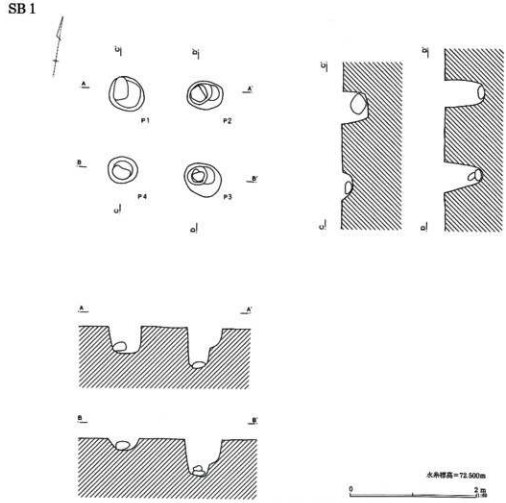
第1号井戸跡（第6図）

O－7グリッドに位置する。第1号溝より新しいと考えられるが、井戸の大きさが溝の中におさまることから溝が埋まりきらない時点で掘り込まれたと考えられる。平面形は円形を呈するものと思われる。規模は検出面での直径4.78 m、深さ2.04 mである。

遺物は出土しなかった。

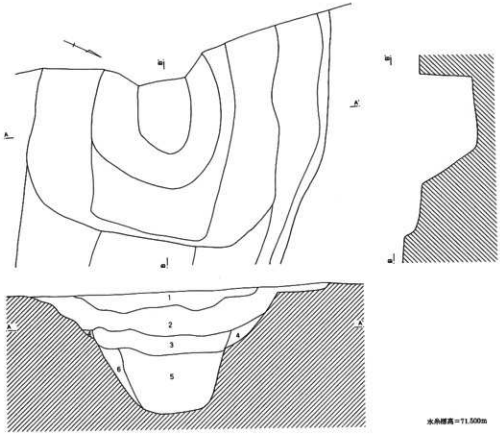
第2号井戸跡（第6図）

R－9グリッドに位置する。風倒木により一部上面が壊されている。検出されたのは東側半分である。



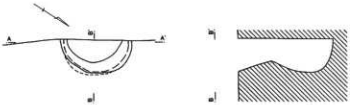
第5図　第1号掘立柱建物跡

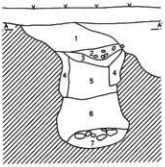
SE 1



SE 1
1　黄褐色砂層　　浅間A火山灰　少量の円礫含む
2　暗黄褐色混砂シルト層　浅間A火山灰多く含む
3　暗灰褐色混砂礫層
4　暗灰褐色混砂シルト層　黄白色ロームブロック多く含む　円礫やや多く含む
5　黒灰褐色混礫砂層　　黄白色ブロックやや多く含む
6　黒灰褐色砂層

SE 2





SE 2
1　極暗褐色土　ロームブロック極少　ローム粒子若干含む
2　極暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子若干　１０～２０mm大礫多く含む
3　極暗褐色土　ローム粒子やや多く含む
4　極暗褐色土　腐敗した井戸枠とみられる有機物が多く混入　ロームブロック、
　　ローム粒子多量含む
5　黒色砂質シルト　　小礫少量　ローム粒子少量含む
6　黒灰色砂質シルト　小礫若干　ローム粒子少量含む
7　黒灰色砂質シルト　５０～１００mm大礫多く含む

水糸標高＝72.000m

0　2m

第６図　第１・２号井戸跡

平面形は円形で、断面は掘り方を含めて上部がロート状、中ほどは筒状を呈し、下部は水袋状に膨らむ。規模は上面で直径２ｍを越えると推定される。中ほどの筒状部分は90cmである。深さは断面で観察されたのは２ｍを越える。

遺物は出土しなかった。

３．土壙

第１号土坑（第７図）

Ｆ－２グリッドに位置し、第２・３号土壙と近接する。平面形は長方形を呈する。長さ１．８８ｍ、幅０．７４ｍ、深さ0.56ｍである。主軸方位はＮ－20°－Ｗである。

遺物は中世のものと思われる小破片が１点出土したのみで、図示できるものはない。

第２号土坑（第７図）

Ｆ－２グリッドに位置する。第１・３号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。長さ３ｍ、幅0.72ｍ、深さ0.6ｍである。主軸方位はＮ－15°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

第３号土坑（第７図）

Ｆ－２グリッドに位置する。第１・２号土壙と近接し群を形成すると考えられる。平面形は長方形を呈する。長さ1.76ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.28ｍである。主軸方位はＮ－16°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

第４号土坑（第７図）

Ｄ－０・１グリッドに位置する。第６・11号溝と重複しこれらより新しい。検出されたのは約半分であるが、平面形は長方形を呈し、長さ2.46ｍ、幅は0.9ｍ以上、深さ0.64ｍである。主軸方位はＮ－69°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

第５号土坑（第９図）

Ｄ－１グリッドに位置する。第６・７号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。東側は調査区外に出る。平面形は長方形を呈する。長さは1.24ｍまで検出した。幅0.72ｍ、深さ0.18ｍである。主軸方位はＮ－70°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

第６号土坑（第９図）

Ｄ－１グリッドに位置する。第７号土壙と重複し、これより古い。平面形は長方形を呈する。長さ1.22ｍ、幅0.76ｍ、深さ0.16ｍである。主軸方位はＮ－71°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

第７号土坑（第９図）

Ｄ－１グリッドに位置する。第６号土壙と重複し、これより新しい。東側は調査区外に出る。平面形は長方形を呈する。長さは1.18ｍまで検出した。幅0.84ｍ、深さ0.2ｍである。主軸方位はＮ－70°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

第８号土坑（第７図）

Ｄ・Ｅ－０グリッドに位置する。不整形の土壙で、西側は調査区外に出る。底面は起伏が激しく、一部長方形の土壙が重複している可能性もある。大きさは南北に2.5ｍ、東西方向は1.58ｍまで検出した。深さは断面で見る限り0.8ｍである。

遺物は出土しなかった。

第９号土坑（第８図）

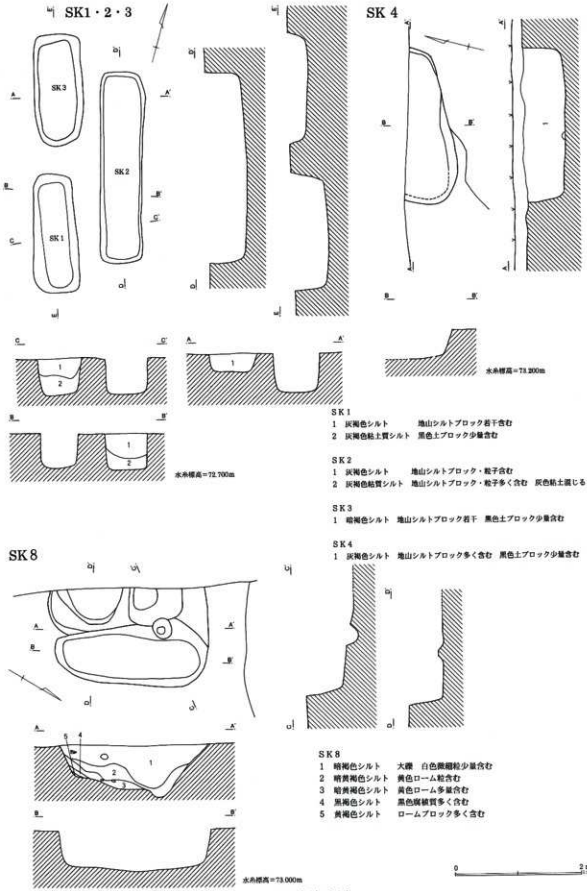
Ｄ－１グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。平面形は長方形を呈する。長さ1.68ｍ、幅0.90ｍ、深さ0.32ｍである。主軸方位はＮ－32°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

第10号土坑（第８図）

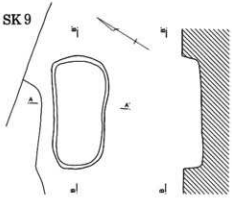
Ｄ－０グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、北側は調査区外に出ているため全体は明らかでない。平面形は長方形を呈すると思われる。長さは0.5ｍ検出した。幅0.68ｍ、深さは壁の土層観察から0.6ｍである。主軸方位はＮ－13°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。


SK1・2・3
SK 4
SK 8
SK3
SK2
SK1
水糸標高＝72.700m
水糸標高＝73.200m
水糸標高＝73.000m
SK1
1 灰褐色シルト　地山シルトブロック若干含む
2 灰褐色粘土質シルト　黒色土ブロック少量含む
SK2
1 灰褐色シルト　地山シルトブロック・粒子含む
2 灰褐色粘質シルト　地山シルトブロック・粒子多く含む　灰色粘土混じる
SK3
1 暗褐色シルト　地山シルトブロック若干　黒色土ブロック少量含む
SK4
1 灰褐色シルト　地山シルトブロック多く含む　黒色土ブロック少量含む
SK8
1 暗褐色シルト　大礫　白色微細粒少量含む
2 暗黄褐色シルト　黄色ローム粒含む
3 暗黄褐色シルト　黄色ローム多量含む
4 黒褐色シルト　黒色腐植質多く含む
5 黄褐色シルト　ロームブロック多く含む
0
2m

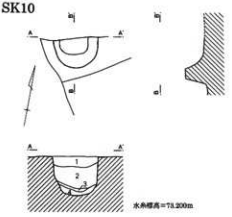
第7図　土壙（1）

SK9



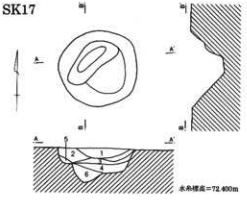
SK9
1　暗褐色シルト　ローム粒、白色粒少量含む
2　黒褐色シルト　ローム粒少、黒色土ブロック含む

SK10

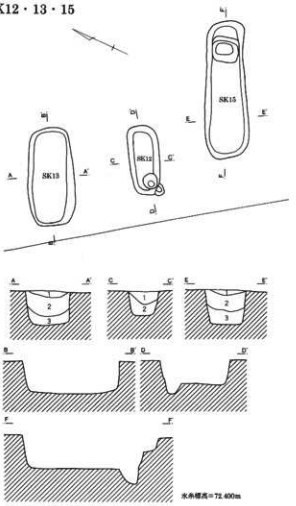


SK10
1　表土
2　暗褐色シルト　白色粒含む
3　暗黄褐色シルト　黄色ロームブロック含む
4　暗褐色シルト　ローム粒少量含む

SK17



SK12・13・15



SK12
1　黒褐色土　ロームブロック若干含む
2　黒褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子若干含む

SK13
1　黒褐色土　ロームブロック10～20mm若干含む　固くしまっている
2　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量含む
3　黒褐色土　ロームブロック10～20mm若干含む

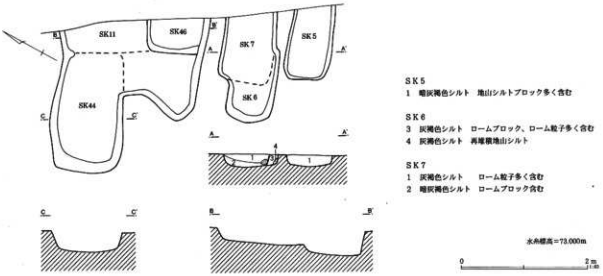
SK15
1　黒褐色土　ロームブロック10～20mm若干含む　固くしまっている
2　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多く含む
3　黒褐色土　ロームブロックやや多　ローム粒子少量含む

SK17
1　暗褐色土　ロームブロック若干　黒色土ブロックやや多く含む
2　暗褐色土　ロームブロック微量含む
3　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多　黒色土ブロック若干含む
4　極暗褐色土　ローム粒子少量含む
5　暗褐色土　ロームブロック若干、ローム粒子多く含む
6　暗褐色土　ロームブロック若干、黒色土ブロックやや多く含む

0　2m

第8図　土壙（2）

SK5・6・7・11・44・46



第9図　土壙（3）

第11号土坑（第9図）

D－1グリッドに位置する。第44・46号土壙と重複し、全体は明らかでない。平面形は長方形を呈する。長さ1.4m以上と推定され、幅は0.44mまで検出された。深さ0.26mである。主軸方位はN－34°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第12号土坑（第8図）

N－7グリッドに位置する。第13・15号土壙と一定の距離をおいて並んでおり軸方位をほぼ同じくする。南隅にピットが絡んでいるが遺構には伴わないものと考えられる。平面形は長方形を呈する。長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.38mである。主軸方位はN－60°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第13号土坑（第8図）

N－7グリッドに位置し、第12・15号土壙と近接する。平面形は長方形を呈する。長さ1.54m、幅0.74m、深さ0.54mである。主軸方位はN－66°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第14号土坑（第11図）

M－6・7グリッドに位置し第24号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。長軸の底部両端にピット状の張り出しを持つ。長さ1.56m、幅0.62m、深さ0.58mである。底部のピットは20～30cm張り出し、底面から15cm掘り込んでいる。主軸方位はN－66°－Eである。

遺物は出土しなかった。

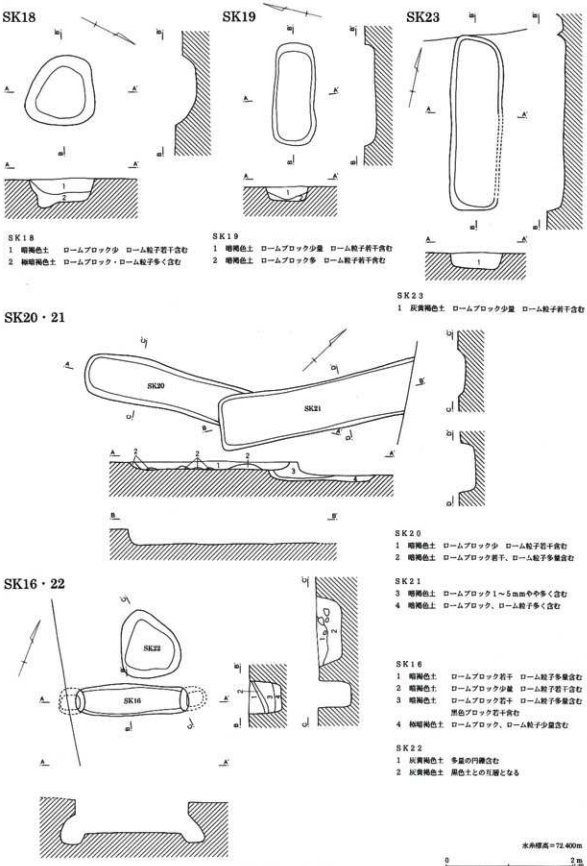
第15号土坑（第8図）

N－7グリッドに位置する。第12・13号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。東側に浅く段を持ちその直下に深さ20cmほどのピット状の掘り込みがあった。土壙は長さ2.16m、幅0.7m、深さ0.5mである。主軸方位はN－69°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第16号土坑（第10図）

N－7グリッドに位置する。第20号土壙と近接する。平面形は長方形を呈し、第14号土壙と同じく長軸の底部両端にピット状の張り出しを持つ。長さ1.8m、幅0.5m、深さ0.5mである。主軸方位はN－67°－Eである。



SK18
1 暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子若干含む
2 極暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子多く含む

SK19
1 暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子若干含む
2 暗褐色土　ロームブロック多　ローム粒子若干含む

SK23
1 灰黄褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子若干含む

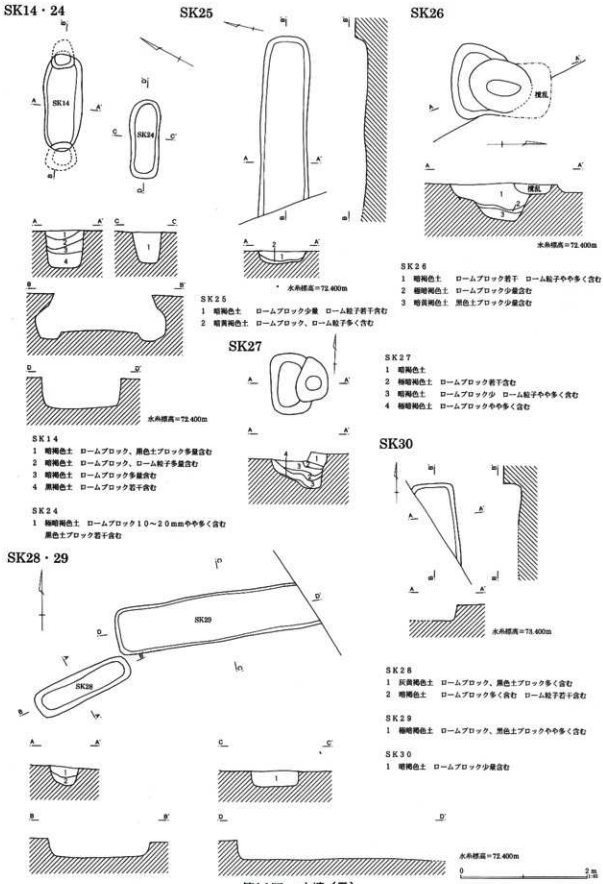
SK20
1 暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子若干含む
2 暗褐色土　ロームブロック若干、ローム粒子多量含む

SK21
3 暗褐色土　ロームブロック1～5mmやや多く含む
4 暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多く含む

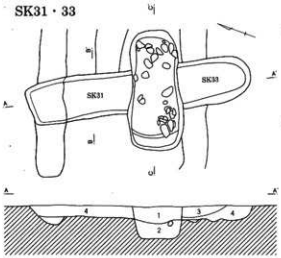
SK16
1 暗褐色土　ロームブロック若干　ローム粒子多量含む
2 暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子若干含む
3 暗褐色土　ロームブロック若干　ローム粒子多量含む
黒色ブロック若干含む
4 極暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子少量含む

SK22
1 灰黄褐色土　多量の円礫含む
2 灰黄褐色土　黒色土との互層となる

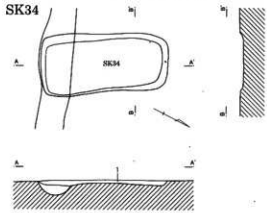
第10図　土壙（4）


SK14・24
SK14
SK34
水糸標高＝72.400m
SK14
1 暗褐色土　ロームブロック、黒色土ブロック多量含む
2 暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子多量含む
3 暗褐色土　ロームブロック多量含む
4 黒褐色土　ロームブロック若干含む
SK24
1 極暗褐色土　ロームブロック10～20mmやや多く含む
黒色土ブロック若干含む
SK25
水糸標高＝72.400m
SK25
1 暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子若干含む
2 暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子多く含む
SK26
撹乱
水糸標高＝72.400m
SK26
1 暗褐色土　ロームブロック若干　ローム粒子やや多く含む
2 極暗褐色土　ロームブロック少量含む
3 暗黄褐色土　黒色土ブロック少量含む
SK27
SK27
1 暗褐色土
2 極暗褐色土　ロームブロック若干含む
3 暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子やや多く含む
4 極暗褐色土　ロームブロックやや多く含む
SK30
水糸標高＝73.400m
SK28・29
SK29
SK28
SK28
1 灰黄褐色土　ロームブロック、黒色土ブロック多く含む
2 暗褐色土　ロームブロック多く含む　ローム粒子若干含む
SK29
1 極暗褐色土　ロームブロック、黒色土ブロックやや多く含む
SK30
1 暗褐色土　ロームブロック少量含む
水糸標高＝72.400m
0
2m

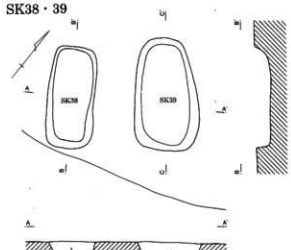
第11図　土壙（5）

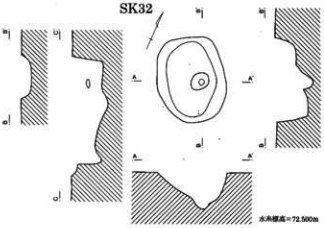


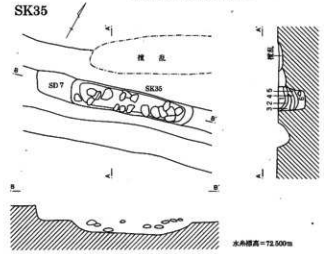
SK31
3　極暗褐色土　ロームブロックやや多　ローム粒子やや多く含む
4　極暗褐色土　ローム粒子少量含む
SK33
1　暗褐色土　ロームブロック若干　ローム粒子やや多く含む
2　暗褐色土　ロームブロック少量　ローム粒子やや多く含む



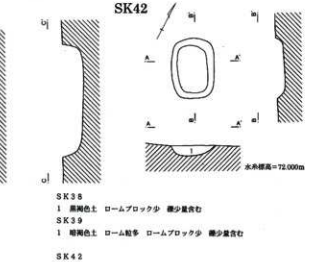
SK34
1　暗灰褐色土　ロームブロック少量含む







SK35
1　暗灰褐色土　ロームブロック少量含む
2　暗灰褐色土　ロームブロックやや多く含む
3　暗灰褐色土　ロームブロック少量含む
4　暗灰褐色土　ロームブロックやや多く含む
5　暗灰褐色土　ロームブロック、黒色土ブロック少量含む
6　暗灰褐色土　ロームブロックやや多く含む

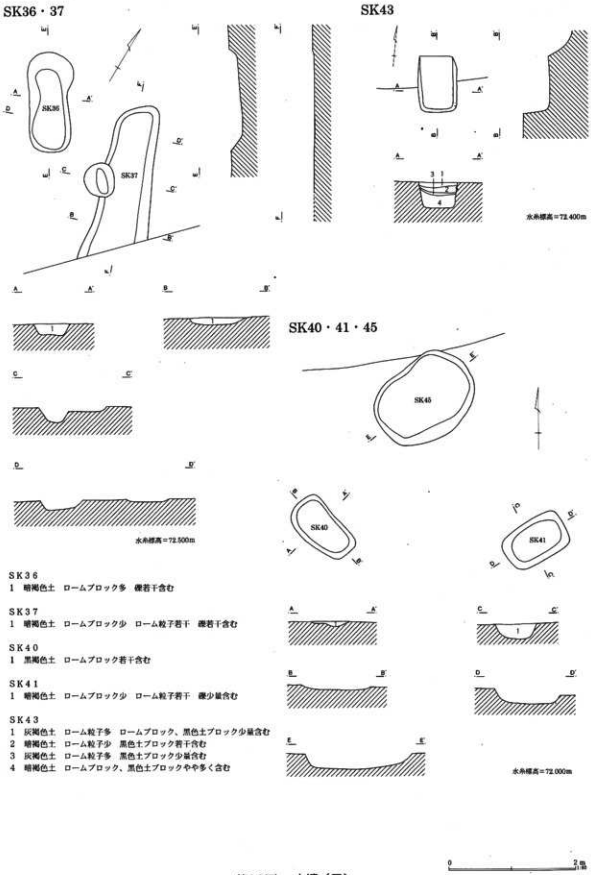


SK38
1　黒褐色土　ロームブロック少　微少量含む
SK39
1　暗褐色土　ローム粒多　ロームブロック少　微少量含む

SK42
1　暗褐色土　ロームブロック、黒色土ブロック若干　ローム粒子やや多く含む

0　2m
1:100

第12図　土壙（6）



SK36
1　暗褐色土　ロームブロック多　礫若干含む

SK37
1　暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子若干　礫若干含む

SK40
1　黒褐色土　ロームブロック若干含む

SK41
1　暗褐色土　ロームブロック少　ローム粒子若干　礫少量含む

SK43
1　灰褐色土　ローム粒子多　ロームブロック、黒色土ブロック少量含む
2　暗褐色土　ローム粒子少　黒色土ブロック若干含む
3　灰褐色土　ローム粒子多　黒色土ブロック少量含む
4　暗褐色土　ロームブロック、黒色土ブロックやや多く含む

第13図　土壙（7）

第17号土坑（第8図）

M－7グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。大きさは1.24×1.18m、深さ0.38mである。底面に楕円形で深さ14cmのピット状の掘り込みを持つ。

遺物は出土しなかった。

第18号土坑（第10図）

L－7グリッドに位置する。不整形の掘り込みで、大きさは1.1×1.1m、深さ0.46mである。

遺物は出土しなかった。

第19号土坑（第10図）

L－6グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。長さ1.6m、幅0.66m、深さ0.46mである。主軸方位はN－77°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第20号土坑（第10図）

L－6グリッドに位置する。第21号土壙と重複しこれより新しい。平面形は長方形を呈する。長さ2.55m、幅0.74m、深さ0.12mである。主軸方位はN－57°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第21号土坑（第10図）

L－6グリッドに位置する。第20号土壙と重複しこれより古い。東側は調査区外にかかる。平面形は長方形を呈する。長さ3.2m検出した。幅は0.86m、深さ0.26mである。主軸方位はN－31°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第22号土坑（第10図）

N－7グリッドに位置する。第16号土壙と近接する。平面形は不整形を呈する。大きさは1.08×0.94m、深さ0.4mである。

遺物は出土しなかった。

第23号土坑（第10図）

K－6グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。長さ2.74m、幅0.94m、深さ0.4mである。主軸方位はN－10°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第24号土坑（第11図）

M－7・L－6グリッドに位置する。第14号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。長さ1.23m、幅0.5m、深さ0.48mである。主軸方位はN－67°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第25号土坑（第11図）

L－5グリッドに位置する。西側は調査区外に出る。平面形は長方形を呈する。長さは2.82mまで検出した。幅0.74m、深さ0.2mである。主軸方位はN－77°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第26号土坑（第11図）

N－8グリッドに位置する。上面の一部を攪乱によって壊されているが、平面形は不整形を呈する。底面は2段になっていた。大きさは1.26×1.18m、深さ0.6mである。

遺物は出土しなかった。

第27号土坑（第11図）

N－8グリッドに位置する。平面形は不整形を呈する。大きさは0.96×0.84m、深さ0.46mである。主軸方位はN－9°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第28号土坑（第11図）

N－8グリッドに位置する。第29号土壙と近接する。平面形は長方形を呈する。長さ1.6m、幅0.45m、深さ0.3mである。主軸方位はN－65°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第29号土坑（第11図）

N－8グリッドに位置する。第28号土壙と近接する。東側は調査区外に出る。平面形は長方形を呈する。長さ3.24mまで検出した。幅0.74m、深さ0.24mである。主軸方位はN－81°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第30号土坑（第11図）

L－5・6グリッドに位置する。おそらく半分以上が調査区外である。平面形は長方形を呈する。長さ1.3mまで検出した。幅は0.66m以上、深さ0.28mである。主軸方位はN－7°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第31号土坑（第12図）

K－5グリッドに位置する。第33号土壙、第8・9・10号溝と重複する。第33号土壙より古く、溝より新しい。平面形は南側が丸みを帯びるが、基本的には長方形を呈する。長さ3.6m、幅0.7m、深さ0.22mである。主軸方位はN－28°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第32号土坑（第12図）

M－6グリッドに位置する。第17号土壙と近接する。平面形は不整形を呈する。大きさは1.34×1.1m、深さ0.5mである。底面に深さ30cmのピットを検出した。

遺物は出土しなかった。

第33号土坑（第12図）

K－5グリッドに位置する。第31号土壙と重複しこれより新しい。覆土中には拳大の礫が多数検出された。平面形は長方形を呈する。長さ1.88m、幅0.9m、深さ0.58mである。主軸方位はN－79°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第34号土坑（第12図）

K－5グリッドに位置する。第7号溝と重複しこれより新しい。平面形は長方形を呈する。長さ2.05m、幅1m、深さ0.06mである。主軸方位はN－26°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第35号土坑（第12図）

K－6グリッドに位置する。第8号土壙と重複しこれより新しい。第33号土壙と同じく覆土中には拳大の礫が多数検出された。平面形は長方形を呈する。長さ1.98m、幅0.36m、深さ0.44mである。主軸方位はN－75°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第36号土坑（第13図）

S－10・11グリッドに位置する。第37号土壙と近接する。平面形はややくずれた長方形を呈する。長さ1.54m、幅0.66m、深さ0.18mである。主軸方位はN－32°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第37号土坑（第13図）

S－11グリッドに位置し、第36号土壙と近接する。南側は調査区外に出る。平面形はややくずれた長方形を呈する。長さは2.4mまで検出した。幅0.92m、深さ0.1mである。主軸方位はN－22°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第38号土坑（第12図）

R－11グリッドに位置する。第39号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。長さ1.6m、幅0.76m、深さ0.24mである。主軸方位はN－31°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第39号土坑（第12図）

R－11グリッドに位置する。第38号土壙と近接し軸方位をほぼ同じくする。平面形は長方形を呈する。長さ1.74m、幅1.04m、深さ0.34mである。主軸方位はN－38°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第40号土坑（第13図）

P－9グリッドに位置する。第41・45号土壙と近接する。平面形は長方形を呈する。上部がかなり削平されているため、ほとんど底面しか残っていなかった。長さ1.1m、幅0.62m、深さ0.08mである。主軸方位はN－42°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第41号土坑（第13図）

P－9グリッドに位置する。第41・45号土壙と近接する。平面形は長方形を呈する。長さ1.06m、

幅0.68 m、深さ0.24 mである。主軸方位はN－58°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第42号土坑（第12図）

P－10グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。長さ0.9 m、幅0.68 m、深さ0.16 mである。主軸方位はN－29°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第43号土坑（第13図）

O－8グリッドに位置する。第1号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。平面形は長方形を呈すると思われる。長さ0.86 m遺存していた、幅0.6 m、深さ0.38 mである。主軸方位はN－5°－Wである。

遺物は出土しなかった。

第44号土坑（第9図）

D－1グリッドに位置する。第11号土壙と重複する。新旧関係は確認できなかった。平面形は長方形を呈する。長さ1.9 m遺存していた。幅1.18 m、深さ0.32 mである。主軸方位はN－66°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第45号土坑（第13図）

P－9グリッドに位置する。第40・41号土壙と近接する。平面形は基本的には長方形と思われるが幅が広くややくずれている。長さ1.65 m、幅1.22 m、深さ0.24 mである。主軸方位はN－51°－Eである。

遺物は出土しなかった。

第46号土坑（第9図）

D－1グリッドに位置する。第11号土壙と重複する。北側は調査区外に出る。平面形は長方形を呈すると考えられる。長さ0.54 m検出した。幅1 m、深さ0.38 mである。主軸方位はN－65°－Eである。

遺物は出土しなかった。

4．溝跡

第1号溝跡（第14図）

O－7～9グリッドにかけて検出された。方形区画の南辺にあたる溝である。第1号井戸と重複し、これより古い。検出された長さは15.8 m、幅は3.9～5.2 m、深さは0.9 mである。底面は平坦で幅0.6～1 mを測る。東側は20cmほど低く掘り込まれている。壁の立ち上がりは上部より下部がやや急である。立ち上がりの角度は、およそ35°～55°であるが南より北側のほうが傾斜がやや緩いようである。

遺物は、出土しなかった。

第2号溝跡（第16図）

N－6～M－8グリッドにかけて検出された。他の遺構との重複はない。検出された長さは15.2 m、幅は0.6 m、深さは0.1mである。

遺物は出土しなかった。

第3号溝跡（第16図）

P－8～O－9グリッドにかけて検出された。第45号土壙とわずかに重複する。第1・2号溝と同じく東西に伸びるが緩やかに蛇行している。検出された長さは15.7 m、幅は1～2 m、深さは35cmである。

遺物は砥石が1点出土している（第23図3）。側面が三角形を呈し、主に上面と下面の半分を使用しており側面の使用はわずかである。両側面及び下面の一部には石材を切断成形あるいは整形したときの工具痕が残る。石質は凝灰岩と思われる。

第4号溝跡（第15図）

G－2～3グリッドにかけて検出された。方形区画の北辺にあたる溝である。上面の一部を攪乱によって破壊されている。第5号溝とした自然地形の落ち込みの北側の縁に沿って伸びる。検出された長さは11.7 m、幅は2.3 m、深さは1.1mである。

遺物は出土しなかった。

第5号溝跡　(第20図)

G－2～H－4グリッドで検出された。溝番号をつけたが流路と思われる自然地形である。北側の縁に沿って第4号溝がある。立ち上がりは緩やかで断面は皿状を呈する。幅は約16mと広く、深さは0.7mほどである。

遺物は出土していない。

第6号溝跡　(第18図)

D－0グリッドで検出された。第4号土壙、第11号溝と重複し、前者より古く後者より新しい。覆土中位には礫に混じって遺物が投げ込まれていた。検出された長さは3.95m、幅は調査区壁の断面で1.75m、深さは0.45mである。

遺物は18点出土したが図示できたのはわずかである(第24図)。1・2は龍泉窯系の青磁碗である。1は蓮弁文。13世紀後半から14世紀初頭。3は古瀬戸盤。4は常滑の甕である。口縁部が剥離している。5は土釜である。口縁部は横ナデ、体部外面はかるい篦ケズリ、内面は指頭痕の上から主に横方向のナデが施されている。在地産。6は内耳土器の口縁部である。7は片口鉢口縁部。青磁以外は15世紀と考えられる。

第7号溝跡　(第17図)

K－5～6グリッドで検出された。第8号溝、第35号土壙と重複し、いずれよりも古い。検出された長さは6.1m、幅は0.4m、深さは0.14mである。

遺物は出土していない。

第8号溝跡　(第17図)

K－5～6グリッドで検出された。第7号溝、第31・35号土壙と重複し、前者より新しく後者より古い。検出された長さは5.8m、幅は0.54m、深さは0.2mである。

遺物は出土しなかった。

第9号溝跡　(第17図)

K－5～6グリッドで検出された。第31・33号土壙と重複しこれらより古い。検出された長さは11.2m、幅は0.4m、深さは0.18mである。

遺物は出土しなかった。

第10号溝跡　(第17図)

K－5～6グリッドで検出された。第7～9号溝と並行する。第31・34号土壙と重複しこれらより古い。検出された長さは10.6m、幅は0.5m、深さは0.18mである。

遺物は出土しなかった。

第11号溝跡　(第18図)

D－0グリッドで検出された。第4号土壙・第6号溝と重複し、これらより古い。検出された長さは13.07m、幅は0.9m、深さは0.48mである。

遺物は出土しなかった。

第13号溝跡　(第19図)

Q－10グリッド～R－10グリッドにかけて検出された。第12号溝と重複し、これより古い。検出された長さは12.7m、幅は1.1m、深さは0.25mである。

遺物は出土しなかった。

第14号溝跡　(第19図)

Q－10で検出された。第13号溝と平行して伸びるが南端は調査区内で切れる。検出された長さは6.8m、幅は0.35m、深さは0.08mである。

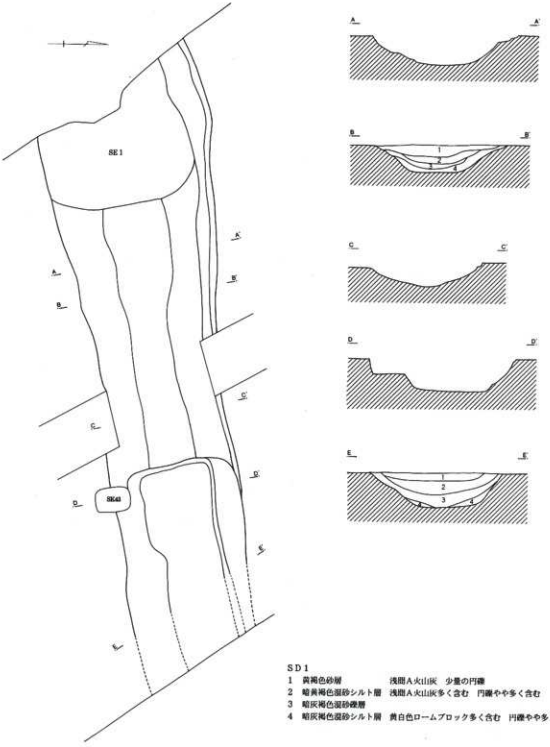
遺物は出土しなかった。

第15号溝跡　(第21図)

R－9～12グリッドで検出された。自然地形による流路跡と思われる。第5号溝とした北側の流路より浅く幅広である。北側の流路は黒色土が主体であったが、本流路は褐色土が主体である。検出された長さは28.2m、幅は13.5m、深さは0.25mである。

遺物は出土しなかった。

SD 1

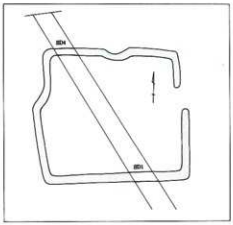


SD 1
1　黄褐色砂層　　浅間A火山灰　少量の円礫
2　暗黄褐色混砂シルト層　浅間A火山灰多く含む　円礫やや多く含む
3　暗灰褐色混砂礫層
4　暗灰褐色混砂シルト層　黄白色ロームブロック多く含む　円礫やや多く含む

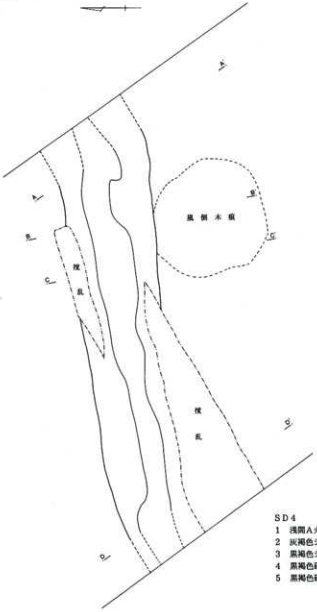
水糸標高＝72.400m

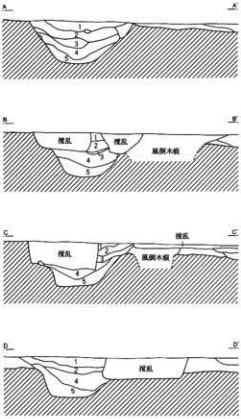
0　2.5m
1:100

第14図　第1号溝跡



SD 4





水糸標高＝72.500m

SD4

1　浅間A火山灰

2　灰褐色シルト　　浅間A火山灰若干含む　地点により多量の礫混じる

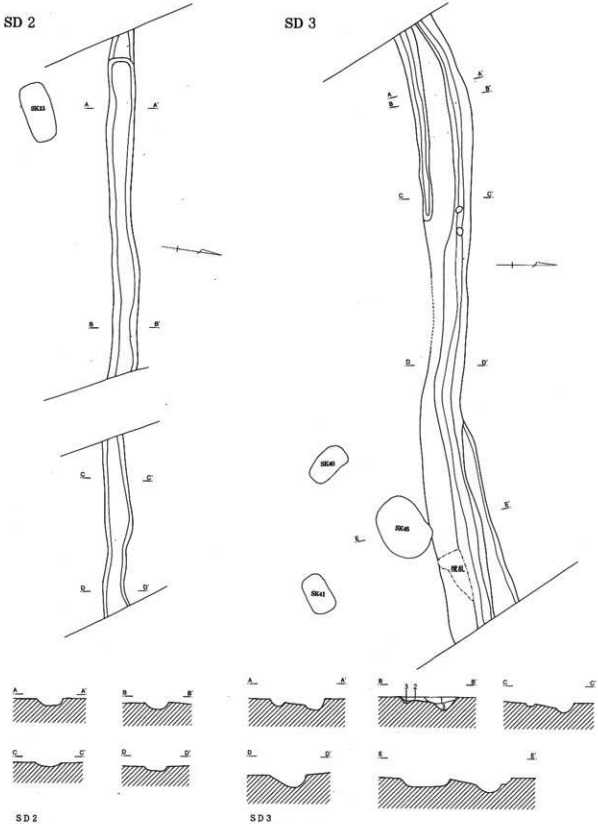
3　黒褐色シルト　　地山の黒褐色シルトブロック少量含む

4　黒褐色砂質シルト　ローム粒子微量　黄白色パミス　白色パミス　若干含む

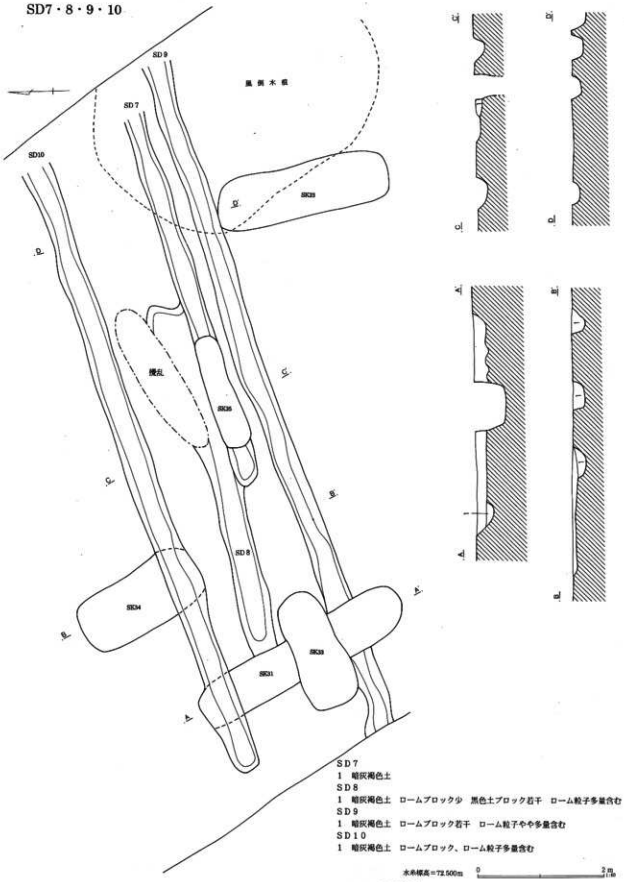
5　黒褐色砂質シルト　地山シルトブロック多く含む　若干の礫混じる

0　2.5m
1:100

第15図　第4号溝跡

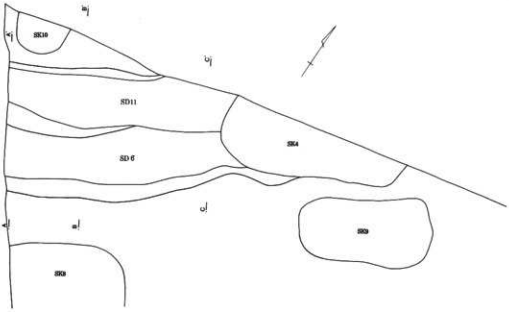

SD 2
SD 3
SK33
SK40
SK46
SK41
SK42
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
SD2
1 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む
SD3
1 暗黄褐色土 浅間A火山灰極めて多量 ロームブロック若干含む
2 暗黄褐色土 浅間A火山灰若干 ロームブロック・ローム粒子やや多く含む
3 暗褐色土 ローム粒子やや多く含む
水糸標高＝72.400m
0
2.5m
1/150

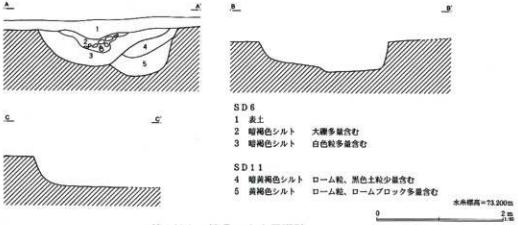
第16図　第2・3号溝跡



第17図 第7・8・9・10号溝跡

SD6・11





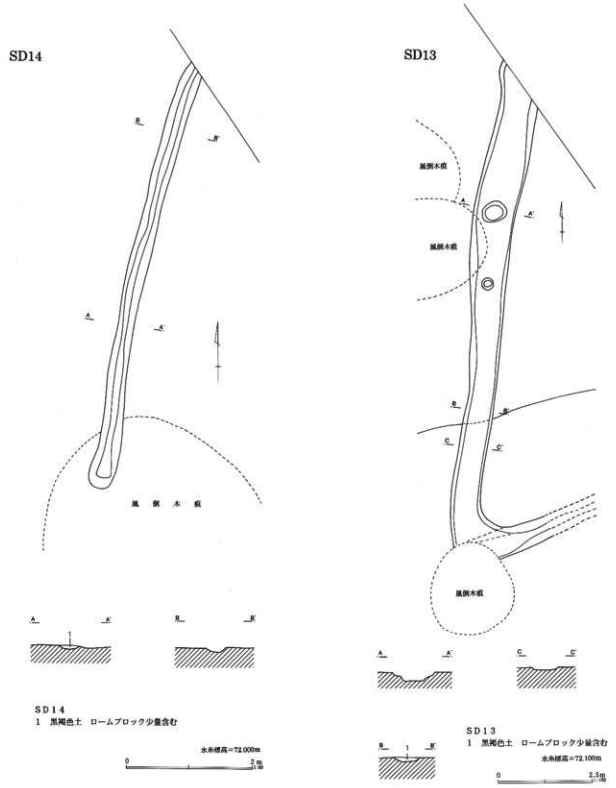
第18図 第6・11号溝跡

5. 道路跡 (第22図)

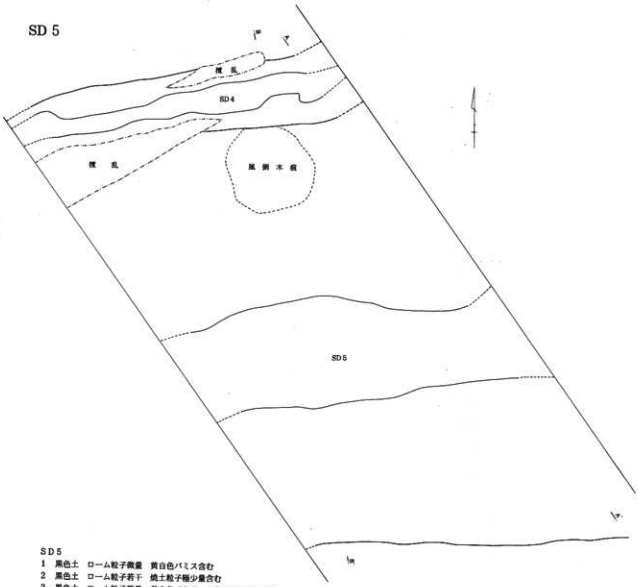
S－10～R－12グリッドにかけて検出した。調査区の東端は攪乱によって壊され、西側は検出面がやや下がったためか、調査区内で消滅してしまった。この道路跡は調査区の南側を通る県道が建設される以前まで使われていた道路である。

具体的な遺構としては、側溝と思われる平行する溝を2条検出した。また、溝間の道路部分はかなり固くしまっていた。覆土には磁器の微小破片などが含まれていた。側溝は第12・16号溝としたもので、第12号溝は検出された長さ15.8m、幅1.1m、深さは0.2mである。第16号溝は検出された長さは10.3m、幅は1m、深さは0.12mである。

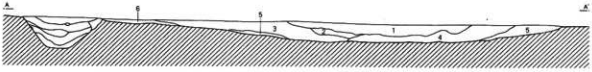
遺物は第16号溝からカワラケの底部破片が出土した（第24図8）。第12号溝からは近代から現代にかけての染付けの微小破片が出土した。

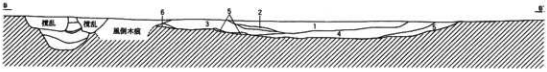


第19図　第13・14号溝跡



SD5
1　黒色土　ローム粒子微量　黄白色パミス含む
2　黒色土　ローム粒子若干　焼土粒子極少量含む
3　黒色土　ローム粒子微量　黄白色パミス　白色パミス若干含む
4　黒色土　ロームブロック5～10mm若干　黄白色パミス　白色パミス若干含む
5　黒褐色土　ロームブロック多く含む
6　黒灰褐色土　ローム粒子多く含む



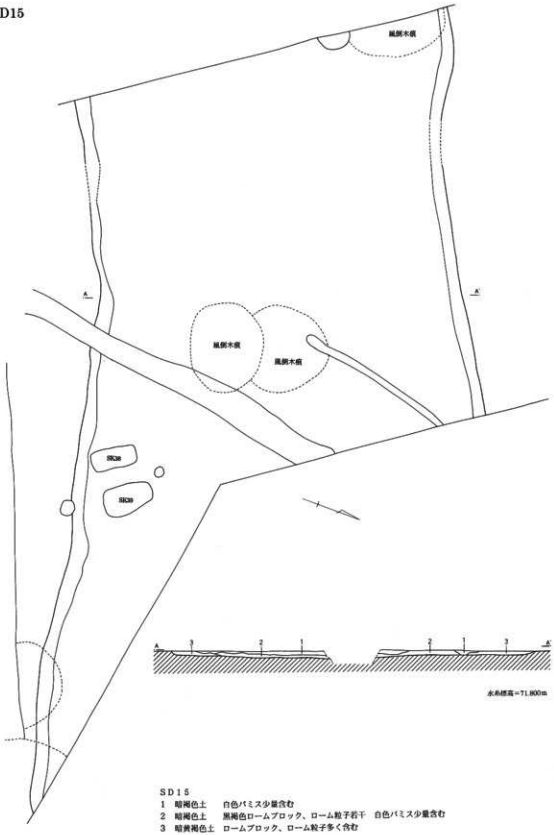


水糸標高＝72.500m

0　4m
1:100

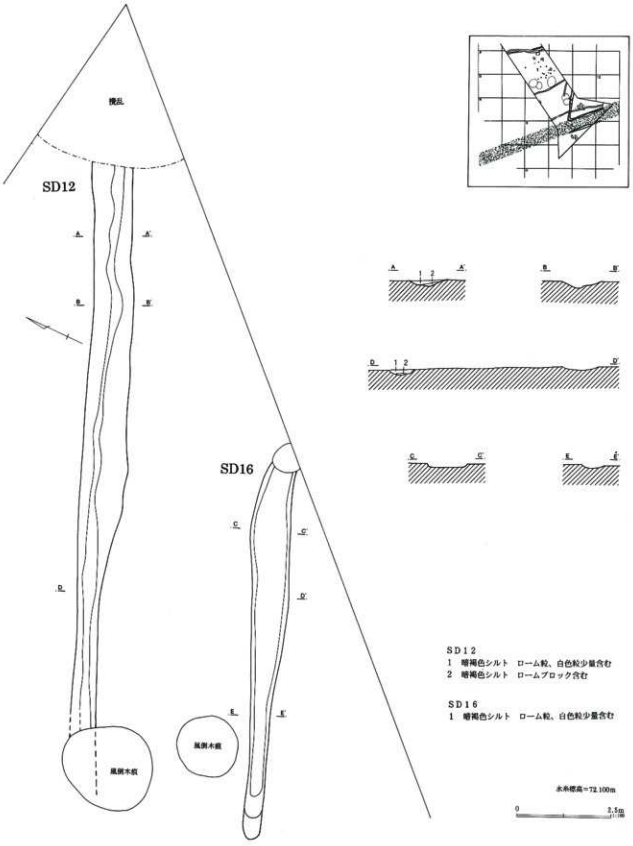
第20図　第5号溝跡

SD15



SD15
1　暗褐色土　　白色パミス少量含む
2　暗褐色土　　黒褐色ロームブロック、ローム粒子若干　白色パミス少量含む
3　暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子多く含む

第21図　第15号溝跡


検出
SD12
A
A'
B
B'
D
D'
SD16
C
C'
E
E'
風倒木痕
風倒木痕
A
1
2
A'
B
B'
D
1
2
D'
C
C'
E
E'
SD12
1 暗褐色シルト ローム粒、白色粒少量含む
2 暗褐色シルト ロームブロック含む
SD16
1 暗褐色シルト ローム粒、白色粒少量含む
水糸標高＝72.100m
0
2.5m
1:100

第22図　道路跡

6．グリッド・その他出土遺物

調査区北側を中心に縄文土器・石器が数点出土した。その中に旧石器時代の石器が1点含まれている。旧石器については、調査区北側は抜根が激しく、遺構の有無を確認するためトレンチを入れたところ、礫層上面で尖頭器が出土したものである。周囲を拡張しさらに検出に努めたが、他には発見されなかった。

縄文時代の遺物については中世の遺構覆土からの出土がほとんどであるが、第8号土壙からは覆土中からややまとまって出土している。第8号土壙は中世の遺構が絡んでいる可能性がありはっきりしない。

旧石器時代（第23図9）

柳葉形尖頭器である。両面加工で、腹面側に広く主要剥離面を残す。

全長54.1mm、最大幅17.7mm、厚さ5.5mmを測る。重量は5.7ｇである。石材は黒曜石を使用する。

縄文時代（第23図1～8、10～13）

土器

1、2、4～7は第8号土壙から出土した。いずれも縄文時代後期、掘之内1式に属するものと思われる。

1は注口土器の口縁部破片とみられる。波状口縁の波頂部に橋梁状の把手を配するものと思われ、把手背面に盲孔と短沈線による8の字状のモチーフを描いている。

2は深鉢口縁部と思われる。

口縁直下に刻みを伴う横楕円形の区画を配する。頸部との境が

「く」の字に張り出す特徴的な器形を示す。

4～7は深鉢胴部で、無文地に曲線的な沈線文が描かれる。

3は第10号土壙覆土から出土したもので、深鉢口縁部である。口唇断面角頭棒状を呈し、口縁直下に1条の沈線が巡る。

縄文時代後期称名寺Ⅱ式～掘之内1式に属するものであろう。

8は第6号溝覆土からの出土である。深鉢胴部で、LR単節の細密な縄文が施文される。縄文時代後期に属するものとみられる。

石器

10は小型の打製石斧である。I-6グリッドから出土した。

外形はいびつな短冊形を呈し、ほとんど反りをもたない。両面加工で、背面に自然面、腹面に節理面を残している。

長さ87mm、最大幅37.5mm、厚さ18.4mmを測る。重量は51.0ｇである。石材は安山岩を使用している。表面の風化が著しい。

11は打製石斧の基部破片である。第1号溝覆土中から出土した。背面に節理面を残し、腹面基部末端に自然面を残している。

現存部分の長さ47.7mm、最大幅39.7mm、厚さ18mmを測る。重量は42.3ｇである。石材は安山岩を使用する。

12は打製石斧未製品と思われるものである。Q-9グリッド河道部分から出土した。

腹面に広く主要剥離面を残し、背面のみ調整剥離がみられる。長さ99mm、最大幅74.5mm、厚さ28.5mmを測る。重量は196.1ｇである。石材は安山岩を使用する。

13は刃部加工のある大型剥片である。R-10グリッドから出土した。

横長楕円形の剥片を使用している。にぎり部分に自然面を残し、残る3方向に刃部がつくりだされる。

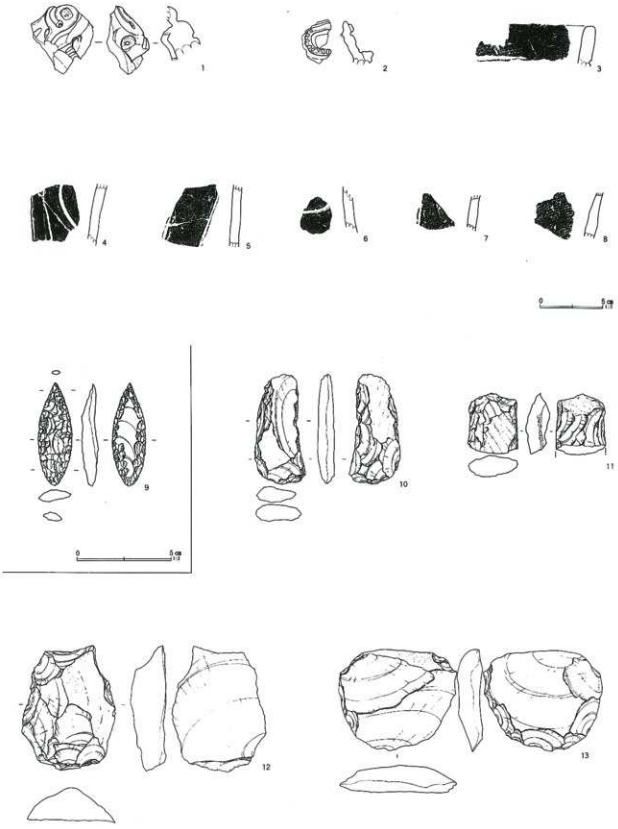
長さ94mm、最大幅80mm、を測る。重量は142.6ｇである。石材は安山岩を使用する。

中世（第24図）

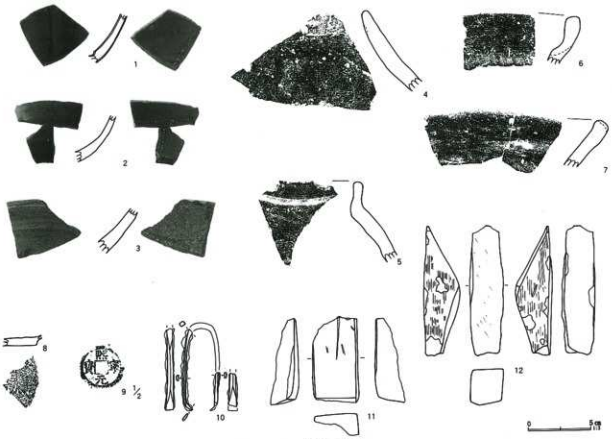
1・2は龍泉窯系の青磁碗である。1は鎬蓮弁。

3は瀬戸灰釉盤。

4は常滑甕、口縁部が剥離している。



第23図　旧石器・縄文時代の遺物



第24図　中世の遺物

5は釜口縁部、灰色を呈し焼成は比較的よい。在地産と思われる。

6は内耳鍋口縁部。黒灰色を呈し外面は煤が付着している。

7は鉢、灰色を呈し焼成は比較的よい。

1～7は第6号溝から出土した。

8はかわらけ底部片である。底部回転糸切、淡褐色を呈し焼成はよい。

9は熙寧元寶（初鋳1068）である。かなりいたみが激しい。直径2.3cm孔径0.7cm。

10は毛抜きである。鉄製品。先端部分が残存。約半分を欠失する。長さ約7cmほどと思われる。9・10はP－9グリッドのピット2から出土した。

11はグリッド出土の砥石である。大半を欠失する。上面、側面ともよく使い込まれている。凝灰岩製と思われる。

遺物の時期は、14世紀代から15世紀後半と考えられる。

V まとめ

東原遺跡の発見は、国土地理院撮影の航空写真に方形のソイルマークが写っていたことによる。調査はこれが中世館跡ではないかという推定のもとに行われた。調査区は幅約11mの道路部分だったため全体を把握するにはいたらなかったが、堀跡や中世の遺物が出土し、当初の推定を裏付ける結果が得られた。

方形区画に関係する遺構は、第1・4号溝である。第1号溝は底幅が広く断面は逆台形を呈する。西側は第1号井戸によって切られているが、東側は底面が20㎝ほど深くなっていた。第1号井戸が同じく深い部分を選んで掘り込んだ可能性は十分考えられる。そのように考えると中央の高い部分は何らかの意図を持って地山を掘り残した可能性がある。第4号溝は底幅がやや狭く、逆台形を呈するが一部に箱薬研を意識したような箇所がある。これらの特徴や規模、溝の位置が写真のソイルマークにほぼ一致することから堀跡であることは間違いない。

第25図は1/2500都市計画図に写真のソイルマーク（図版1）をおとしたものである。黒塗り部分が第1・4号溝である。南側第1号溝は、検出した位置と写真で推定した堀がずれているが、これは写真の中心位置及び角度の関係で南側ほど歪みが大きいためと思われる。

写真には黒い部分と白い部分が見える。黒い部分は方形に廻り、白い部分はその内側に沿って見られることから、前者を堀跡、後者を土塁の跡ではないかと推定した。堀跡の黒色部分はかなり良好に認められるが、部分的に不明瞭な所もある。特に西辺はぼんやりしていて見づらい。特徴的なのは東辺である。北側1/3ほどの所は堀も土塁も切れているようである。そして、ここから北と南で堀は喰違いとなっている。ここを小口と考えてまず間違いないであろう。南辺はほぼまっすぐ延びている。西側1/3ほどの所が色が薄くなっており、堀が切れるようにも見えるがよくわからない。土橋などの施設があるのであろうか。西辺はかなり薄くなっているが北西隅から南西隅までまっすぐでないことだけは確かなようである。北側から1/3ほどの所で曲がっているが、これが単純に曲がっているだけなのか屈曲しているのかよくわからない。ここに「折れ」があるのではないかと想定した。北辺はほぼまっすぐであるが中央部がやや不明瞭で若干変化しているように見える。図では内側にやや湾曲しているように復原したが、ここにも「折れ」がある可能性がある。

土塁の痕跡が特に顕著なのは北東隅で、堀の内側に沿ってL形に曲がる。南辺はやや薄いが幅広く見られ、東辺は堀に沿って細く存在するようである。北辺の西側と西辺には見えない。現在遺跡は畑となっており、土塁の痕跡は全く確認できない。調査時にも調査区壁の断面を観察したが、地山面まで耕作が及んでいたため確認できなかった。ただ、地元の方からは畑にやや起伏があったため、耕作の際に高い所から低い方に徐々に土を移動したと聞いている。以上が写真から読み取れるプランである。まとめると以下の点が特徴となろう。

東辺北寄りに喰い違いがあり、小口と考えられる。

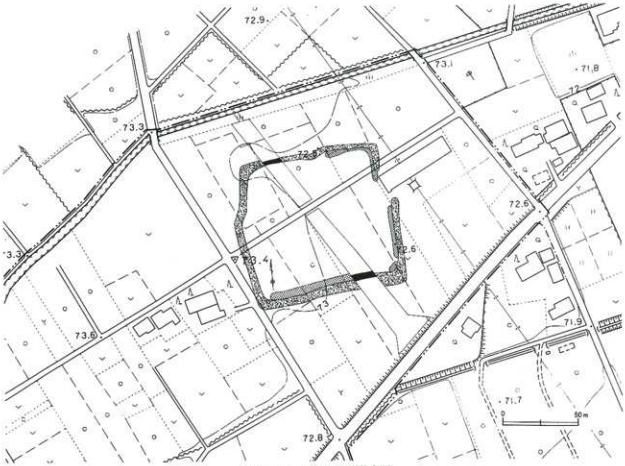
西辺北寄り及び北辺中央に折れがありそうである。

南辺に土橋状のものがある可能性がある。

土塁は北西隅、東辺及び南辺にあったと思われる。

規模については前述したように、調査の結果と写真とにずれがあるために正確な数値はだせないが、南北約90m、東西は南辺で約97m、北辺で約92mと考えられる。

周辺で発掘調査が実施され、具体的な内容が明らかになっている、類似の遺跡には、美里町新倉館跡、岡部町六反田遺跡、熊野遺跡、西龍ヶ谷遺跡、上里町檜下遺跡、熊谷市黒沢館跡、樋之上遺跡、深谷市割山遺跡、児玉町古井戸遺跡などがある。いずれも13～15世紀代の遺物を出土し、一部16世紀の遺



第25図　方形区画推定図

物を出土している。これらのうち全容がわかっているのは、新倉館跡と黒沢館跡である。

新倉館跡は、二重の堀に囲まれている。北側は土取りされ、西側は一部道路の下になっているが残存状況は良好である。内堀は幅8.2m、深さ1.8mで内郭は南北73m、東西61mの規模である。内部には掘立柱建物跡、礫配石、粘土の堆積などが見られた。外側の堀は、幅5.2m、深さ1.6mで外郭規模は南北140m、東西120mと推定されている。外堀の東南隅に折れがあるのが特徴である。遺物は木簡、漆塗り碗、かわらけ、内耳土器、古銭や石製品などが出土している。時期は15世紀前半と報告されている。

黒沢館跡は、幅3m前後、深さ1m前後の堀で囲まれる。特徴は一辺に折れを持ち平面形が台形を呈することである。東辺には2箇所土橋状の小口がある。北西隅と南西隅は出隅となり、南辺には折れが見られる。規模は東辺が66m、北辺が62m、西辺が39m、南辺は折れの東が37m、西は24mである。また、堀の内側西辺北側と北辺西側の2箇所に土塁が残存していた。報文によれば上面幅1.24m、下面幅2.05m確認面からの高さ44cmである。内部には溝、土壙のほか折れの西側にピットが多数検出され、この部分に掘立柱建物があったと思われる。遺物は堀跡から、かわらけ、内耳土器、板碑などが、グリッドからは平碗、折縁皿、擂鉢、板碑などが出土している。板碑の年号は堀跡出土が貞和4年(1348)、康永3年(1344)、グリッド出土は永享10年(1438)で、遺物の時期は15～16世紀と報告されている。

他の遺跡については全体が調査された例はないが、基本的に方形のプランを示し、70mから90mほどの規模を持つようである。このように平面形態、規模、出土遺物の共通性ということも、本遺跡が該期の館跡という推定を補強するものと考える。

遺構の時期については、第1・4号溝とも遺物を出土がなく、第1号溝と重複している第1号井戸か

らも遺物が出土しなかったため確定できなかった。周辺では堀の外側の第6号溝から青磁碗や瀬戸灰釉盤、在地産の鉢、釜などが出土しており、青磁以外は14～15世紀後半のものと思われる。現状では積極的な関係は立証できないが、堀跡と関係のある遺構として捉え、消極的であるが堀跡もその時期と考えておきたい。また、館跡がいつ構築され、どれほどの期間存続したかということも現状では不明といわざるを得ないが、出土遺物に15世紀後半より新しいものが見られないことから、現段階ではその時期をもって廃絶したと考えておきたい。

居住者については、本遺跡について直接記録された文献や伝承は残っていないため不明である。前述の黒沢館跡は、江戸時代まで堀が埋まりきらなかったらしく「訪題録」「新編武蔵風土記稿」に記載があり、檜下遺跡は安保氏の館跡と推定されているが、新倉館跡やその他の遺跡のように、調査によって発見されたものは記録・伝承等は全く残っていないのがほとんどである。したがってその居住者は不明で遺跡の性格についても報告者によって解釈が分かれているのが現状である。

15世紀の関東地方は鎌倉公方と関東管領の対立によって争いの絶えない状況であった。康正元年(1455)足利成氏が古河に入ると、抗争は一段と激化し各地で戦乱が繰り広げられる。特に利根川と荒川にはさまれた地域は両陣営の防衛線が敷かれ幾度となく激しい合戦が繰り返された。東原遺跡はこのような時期と地域の真っ只中に存在したのである。

旧石器時代の遺物として柳葉形尖頭器が出土した。花園町で旧石器が出土したのは始めてである。荒川左岸では寄居町末野遺跡で局部磨製石斧などが出土しているが、上部山地に立地しており年代も埼玉県で最も古い時期のものである。熊谷市鹿嶋遺跡は本遺跡よりも下流で台地の奥に入っており現荒川からは離れているが、荒川の古い流路に面していた可能性もある。ここからはナイフ形石器などが出土している。荒川左岸に面した櫛引台地では、今のところ他に旧石器は出土していない。周辺で同種の尖頭器が出土した遺跡は深谷市東方遺跡、美里町如来堂B遺跡、西山遺跡がある。東方遺跡出土品は本遺跡のものより細身で珪質砂岩製である。如来堂B遺跡のものは黒曜石製で東方遺跡出土品に類似するが1/2を欠失している。西山遺跡出土品は黒曜石製で本遺跡の遺物に形態的に類似する。本遺跡の尖頭器は東方遺跡出土品より先行するものであろう。

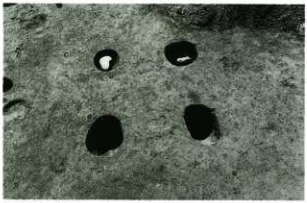
参考文献

市川修　1983『塚屋・北塚屋』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上尚明　1986『将監塚・古井戸Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
今泉泰之　他　1982『割山遺跡(第3次)』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　深谷市教育委員会
梅沢太久夫　『北武蔵城郭フォーラム』 http://www.page.sannet.ne.jp/u-takuo/
金子正之　1985『三尻遺跡群　黒沢館跡・樋ノ上遺跡』 昭和59年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　埼玉県熊谷市教育委員会
埼玉県　1967『荒川　自然　一荒川総合調査報告書1－』
埼玉県教育委員会　1988『埼玉の中世城館跡』
埼玉県教育委員会　1968『埼玉の城館跡』
埼玉県立歴史資料館　1991『六反田』 岡部町六反田遺跡調査会
澤出晃越　1985『割山遺跡(第4次)』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集　深谷市教育委員会
澤出晃越　1988『東方城跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集　深谷市教育委員会
塩野博・小久保徹　1975『黒田古墳群』 花園村黒田古墳群発掘調査会
篠崎潔・平田重之　1989『巳樹原・檜下遺跡Ⅱ』 巳樹原・檜下遺跡調査会報告書第1集　巳樹原・檜下遺跡調査会
曹谷浩之・岡本亭男　1980『武蔵新倉館』 埼玉県児玉郡美里村教育委員会
鈴木敏昭　1983『台耕地(Ⅰ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高村敏則　1994『橋屋遺跡』 花園町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第1集　花園町教育委員会
鳥羽政之・平田重之　1997『熊野遺跡発掘調査概要報告書』 大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第6集　岡部町遺跡調査会
鳥羽政之・宮本直樹　他　2000『町内遺跡Ⅰ』 岡部町埋蔵文化財調査報告書第5集　岡部町教育委員会
冨田和夫　2002『熊野遺跡(A・B・C区)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
花園村　1978『花園村史』
花園村　1979『花園村の今昔』
水村孝行　1980『甘粕山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　埼玉県教育委員会
宮井英一　1985『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村松篤　他　1997『埼玉考古』 別冊第5号　埼玉考古学会
森下昌一郎　1998『台耕地遺跡』 花園町遺跡調査会発掘調査報告書第3集　花園町遺跡調査会

写真図版

東原遺跡航空写真
（花園町教育委員会提供）

堀跡推定範囲


第１号建物跡

第１号井戸跡

第２号井戸跡

第１号溝跡

第４号溝跡

第３号溝跡

第５号溝跡

第６号溝跡

第7・8・9・10・11号溝跡

第13・14号溝跡

第1・2・3号土壙

第8号土壙

第12号土壙

第13号土壙

第15号土壙

第16・22号土壙

第18号土壙

第19号土壙

第14・24号土壙

第25号土壙

第26号土壙

第27号土壙

第28・29号土壙

第30号土壙

第31・33号土壙礫出土状況

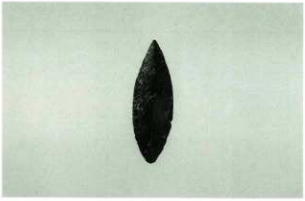
第31・33号土壙

第35号土壙

第36・37号土壙

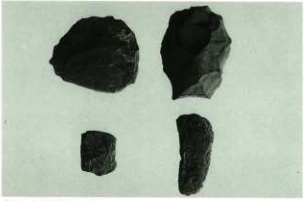
第38・39号土壙

第42号土壙



グリッド出土尖頭器

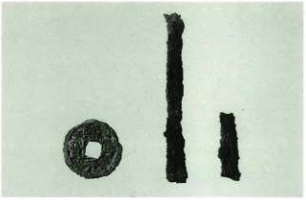
グリッド出土縄文土器



グリッド出土石器

第6号溝出土遺物1

砥石



金属製品

報告書抄録

ふりがな	ひがしはらいせき
書名	東原遺跡
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大里中央地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	I
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第284集
著者氏名	木戸春夫・渡辺清志
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦2002（平成14）年11月29日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
東原遺跡（ひがしはらいせき）	埼玉県大里郡花園町大字北根字東原 178番地（さいたまけんおおさとぐん はなぞのまちおおあざきたね あざひがしはら）	11407	54	36°8′39″	139°15′34″	20010611 ～ 20010930	2,600	農道建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東原遺跡	城館跡	旧石器時代		柳葉形尖頭器	
		縄文時代後期		縄文土器 石器	
		中世	掘立柱建物跡1棟 土坑46基 溝跡16条 井戸跡2基	陶磁器 鉄製品 銭貨 石製品	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第284集

花　園　町

東原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大里中央地区）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成14年11月22日 印刷
平成14年11月29日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　大里郡大里町船木台4-4-1
電話　0493 (39) 3955

印刷／誠美堂印刷株式会社